研究ノート
トランスパーソナル心理学 / 精神医学
Vol.22, No.1, Mar, 2023, p.87-p.99

中井久夫と禅

塚崎　直樹　京都精神保健福祉推進家族会連合会*

Hisao Nakai and Zen

TSUKASAKI Naoki

1．はじめに

中井久夫は統合失調症の治療に関して大きな業績を残した精神科医として知られている。統合失調症の寛解過程を明らかにするため、絵画療法をはじめ、芸術療法を大胆に取り入れた。その細かな観察と柔軟な関わりによって、統合失調症の治療に説得力のある関わりの方法を提示した。スクイッグル、分割色彩法、粘土など、すでに知られている方法も、中井の工夫によって、臨床に生きたものとして導入された。河合隼雄の紹介した箱庭療法に触発されて、風景構成法を考案したこともよく知られている。簡単に導入でき、侵襲性の少ない技法の開発に、すぐれた感覚を示した。さらに、難解と言われ、名前が広く知られているものの、実際の読者が少なかったサリヴァンの著書の翻訳を行い、その幅広い臨床的まなざしに、人々を導いている。

神戸大学医学部精神神経科の教授であった時、阪神淡路大震災に遭遇し、震災後のこころのケアに大きな役割を果たしただけでなく、震災のトラウマからの関連として、PTSDや解離性障害などにも、社会的関心を向けることに力を注いでいる。大学教授として、多くの臨床家を育て、臨床に関わるアイデアを刺激し、統合失調症に関する社会的関心を引き出すことにも成功したと言えるだろう。評論活動で、精神医療に関する幅広い理解の道を開いただけでなく、翻訳家として、ギリシャの詩人カヴァフィスの翻訳を行ったことも高く評価されている。2013年文化功労者に選ばれているが、主として評論翻訳の業績に対するものである。

このように中井の業績を見る時、そこに禅が関係していることは感じられにくい。中井の作品の中に、禅にふれているものは極めて少ない。中井が晩年、カトリックに入信していることからも、禅との関連はたどりにくいように感じられる。しかし、多くの予想を裏切って、中井が禅から多くを得ていたのではないかという視点を提供してみたいと思う。そして、それが何故隠されたのかにふれて見たい。

2．中井久夫と禅との関わり

2002年中井は前立腺がんの手術を受けている。その時の話である。

> （前立腺がんの摘出手術の）手術前二十四時間から薬はすべて中止になる。…手術が終わると何と私は烈しいめまいのただなかにあった。等速度で反時計まわりに世界がまわる。私は眼球震盪が起こっているかと思ったが、医師によれば、垂直の眼球震盪が少しあるだけだという。窓から見える山

＊ bankyu@mbox.kyoto-inet.or.jp
〒606-8175 京都市左京区一乗寺築田町 56-1

の桜がどんどん左へ行く。…めまいは、貧血のためとされ、出血箇所を探すための再開腹となった。土曜日の夜に同じチームが集まってくださったのは今も感謝している。しかし出血箇所はみつからず、めまいは続いていた。術後せん妄（意識障害プラス幻覚）からようやく抜けた私は、ここで初めてめまい発作のことを思い出した。…私は、手術後の身体が薬に鋭敏になることを考え、まずわずか（ヒデルギン）半錠を飲むことにした。そして座禅の半跏の姿勢をとって、自分を落ち着かせようとし、何が来るかを待った。（中井, 2019b, pp.170-171）

このあと、中井は「ウォーッ」という大声をあげる。非常に緊急性の事態であった（この時の状態は、同書のp.280にもある）。

このような緊急事態の時に、普通の人間は、精神を落ち着かせるために坐禅の姿勢をとるものだろうか。とても思いつきはしないだろう。過去に坐禅に親しんでいるか、坐禅の体験から確かな手ごたえをつかんでいないと、試みようともしないだろう。つまり、危機的状態になると、反射的に坐禅を選んでしまうほど、中井にとって親しい方法であったということであろう。また、「半跏の姿勢」という表現も坐禅に親しんでいることを感じさせる。

もう一つのエピソードを紹介してみたい。これは、2017年に行われた宗教学者山折哲雄と社会学者上野千鶴子の対談である。

上野　…施設に入所された精神科医の中井久夫さんに会いにうかがったんです。中井さんもヨーロッパ的な知性をものすごく理解した人です。それがなんとカトリックに入信なさったんだそうです。これもショックを受けました。

山折　そうですか。

上野　それで、「先生にとって、信仰ってなんですか？」って食い下がったんですね。答えが驚くなかれ、「便利なもん、だね」って。

山折　アイロニーじゃなくて？

上野　あの方、もともと禅問答みたいな話をなさる方だから、アイロニーかもしれません。それ以上はわからない。

山折　禅問答でしょうな、それは。（山折・上野, 2018, pp.118-119）

上野の議論は、西欧的知性の持ち主である中井が、死を目前にしてカトリックに入信したのは、理解できない、安易な妥協、思索の放棄ではないかという文脈の話なのだが、山折が「アイロニー」ではないかと言うと、上野は「禅問答みたいな話」と答えて、山折は「禅問答でしょうな」と結論づけてしまう。こういう流れになってしまうのは、中井の中に「禅問答」と受けとめられるような表現の質がなければ、成り立たないことだろう。山折は宗教学と言っても、仏教思想への関心が深く、単なる思いつきで「禅問答」という言葉を持ち出しているとは考えにくい。上野も「あの方、もともと禅問答みたいな話をなさる方」と認めている。二人とも、中井が禅的であるということを認めているのである。

中井が坐禅に親しい状態であったとしても、それが単なるリラックス法や身体技法に留まるものではなかったと言うことが予想されるのである。

中井と禅の関わりをより直接に表す資料は、筆者が中井本人から送られた私信を紹介するのが明確かも知れない。これは、筆者が、日本トランスパーソナル心理学・精神医学会の機関誌に投稿した論文（塚崎, 2007）へのコメントである。

2007.6.22.

塚崎　直樹　先生

中井　久夫

『公案からみた禅と心理療法』を拝見しました。DSM Ⅲと同時にAPAから出た精神療法のリストにZenものっていますが、公案が心理療法に役立たぬこと、仰せの通りとかねがね思っていました。ただ、一部の精神療法者にはよいかもしれません。

私は、実は、久松真一先生の主宰する学道道場にいたことがあるのです。これは高校の教師で和歌山大の教授になっていた東大仏文、京大国文卒の人の紹介で、実際には、道場の事務所に月50円で下宿できるのでOKしたのです。同居は柳田（旧姓当時岡村）さんという、のちに花園大学の学長になった、禅では有名な方です（夫人が柳田謙十郎というマルクス哲学者のおじょうさんで、禅に入られました。）北原白秋の息子さんもおられ、この人は中国戦線で残虐行為を強いられた、その悪夢に終生苦しめられていました。私一人残って、皆故人です。

“東大の宗教”が無教会で、“京大の宗教”は学道禅でした。数学者、工学者も哲学者、文学者もいました。坐禅中に統合失調症を発症して一回生の私が奔走することもありました。私が離れたのは、皆さん、誰はまだ“空”しかわかっていない、“空を空じなければ”とお互いに悟りのレベルをけなし合うようなところがあったこともあります。それに妙に英語に直さなければ、というところもあって、FAS禅とかいうことになったりしました。Fはformless self あとは忘れました。ただ、私はすぐ、考えてさっさっさと流してゆくことができ、皆さんの苦闘がふしぎに思えました。ただ、それ以上に“進歩”はありません。患者とあっている時も“自分があるかないかわからないが、全く不安でない状態”に入れますし、その後も、長い間待たされた空港でも、パリの教会でも、打坐するとすっと入れて、その後よみがえった思いがします。これは家族にも話していませんが、仏陀が説いた南伝仏教の経典には、自分の達した境地を人に語ることを禁じていますのを、尤もなこととおもっていますので。フロイトのfrei flottierende Aufmerksamkeitとも通じているのではと思います。

この書簡に書かれていることは、「龍安寺にて」（中井, 2017, pp.185-188）でふれられている内容に重なるが、中井が禅と関わっていたことをここまで踏み込んで示してはいない。この書簡からあきらかになるのは、中井が久松真一と関わりがあり、坐禅のグループにも参加していて、おそらく積極的に坐禅にも励んでいたことである。当然、久松とも面識があるであろう。しかし、そのグループとは感覚が合わず、比較的短期間で距離を取ってしまったと思われる。北原白秋の息子は北原隆太郎（北原, 2006）で、印象に残った存在であったようだ。「中国戦線で残虐行為を強いられた、その悪夢に終生苦しめられていました」という部分は、戦争の生み出すPTSDとしていたのである。

もうひとつは、禅の実践から得たものがあるということである。「患者とあっている時も“自分があるかないかわからないが、全く不安でない状態”に入れます」ということ、もう一つは比較的容易に、禅定に入れるということである。これらをあえて取り上げていることは、その体験が坐禅のもたらしたものであるという確信があるからであろう。そして、「これは家

族にも話していませんが、仏陀が説いた南伝仏教の経典には、自分の達した境地を人に語ることを禁じていますのを、尤もなこととおもっています」としている。しかし、比較的簡単に禅定に入れると言うことが、「自分の達した境地」と言えるであろうか。中井の達した境地は更に深いものがあって、表現されているものはそのほんの入口にすぎないと見た方がよい。

3．中井久夫の禅体験

先に見た、「患者とあっている時も“自分があるかないかわからないが、全く不安でない状態”」について、更に中井が述べている文章を検討してみたい。

次に示すのは、中井が神戸大学を退官するにあたって、若い精神科医と治療について、座談会をもった時の記録である。中井は面接の時の姿勢について、次のように語っている。

> すべてを包み込むとか、やさしいとか、そういう感じではないな。ホールディングというのとも違う。何でしょう。むしろ、虚になるというべきか。自分がなくなる。あけひろげた座敷に青嵐が吹いているというイメージを描いたことがあるけれども、自分がなくても少しも不安にならない。むしろ、俺が、自分が何かしているという意識がある時は治療がうまくゆかないんです。
>
> といって、無手勝流というのでもない。結構、布石を考えてやっているのですが、それが自然にできてゆくので、俺がやっているという意識がない。チクセントミハイという社会学者のいう「フロー」（ノリ）というもので、女性性と関係がないかもしれない。フロイトが鏡とか「自由にただよう注意」という、それだって、こういうものかもしれない。
>
> 私は男性的といわれたことがないので、男性性というものをうまく理解していないのかもしれない。といって、女性的とも、大人になってからはいわれない。むしろ中性的だといわれたことがある。ときどき「今だ！」という感覚が起こって、コンフロンテーションをやる。ここがヤマ場だという感覚。でも、それは一人の患者の治療で一回か二回。三回というのは稀。ふだん“虚”になっていないと「今だ！」も起こらない。
>
> なぜか分裂病患者以外では、たいていはこうならない。どうしてですかね。（星野他, 1998, p.227）

ここでは、坐禅との関係はふれられていないが、自分がなくなる体験を治療の中に位置づけていることがわかる。「虚になる」ということは、一般には「無」になると表現される状態であるが、手垢のついた言葉を避けて、「虚になる」としたものであろう。「自分が何かしているという意識がある時は治療がうまくゆかない」として、「虚」になることの重要性を指摘している。そしてこの「虚」になったときに、「布石を考えてやっているのですが、それが自然にできてゆくので、俺がやっているという意識がない。」という。つまり、「虚」になって無念無想になっているだけではない。治療の手がかりが、「自然にできてゆく」。つまり禅定の中から、智慧が自然に生まれて来る。これは、鈴木大拙が述べている「無分別の分別」というものであろう。一人の患者の治療過程で一度か二度しか起こらない「今だ！」という瞬間が訪れる。この流れを、禅体験と結び付けて考えると、中井は禅にふれることによって、一種の「覚」「悟り」体験を経験し、それを治療に応用している。禅体験との関係を伏せて、体験を語

ると、それは中井の臨床感覚、経験の中から生み出された智慧として受けとめられる。中井の語り口は、ほとんどがそのような形なのである。中井が禅体験との関連に言及しないのは、「自分の達した境地を人に語ることを禁じ」られているからであろう。

「自分の達した境地を人に語ること」が禁じられるのは、語ることによって、周囲の承認、評価、称賛を受けると、それが傲慢さにつながり、自我肥大から万能感を刺激され、結果的に、そこから得られる智慧を失ってしまうからである。反対に、周囲からの否定に合うと、対抗意識が生まれやすい。また周囲の嫉妬を刺激することになり、思わぬトラブルに巻き込まれることにもなる。無用な葛藤を周囲に引き起こす可能性があり、言明は「禁止」されるのである。また、本人も直観的に危険性を感じて、口をとざすものである。

別の場面では、次のような説明もなされている。これは、中井が精神科を専攻分野に決めてからの話である。

> そのときから精神科病棟に入る方法を考えはじめました。その頃ジョージ・シャラー（Schaller, G.B., 1964-1977）という類人猿学者がいて、彼がゴリラと出会う話を本で読みました。その頃日本のサル学者はゴリラとうまく出会えなくて、代わりに雑食性のチンパンジーを餌付けして研究していました。失礼ながらエコノミックアニマルのやり方だと思いました。研究が終わるとチンパンジーはバナナをもらいに出てきても手ぶらで帰っていくわけです。日本の探検隊は「ゴリラのようなノーブルな動物はとても人間の祖先」とは思えないといいました。これは当たっていたのですが、シャラーという人はひとりで森に入ります。するとゴリラにはさっぱり出会えないけれども、ゴリラのいた痕跡は便とか何かいっぱいあります。だからゴリラはこの森にいるに違いない。実際、シャラーが森のなかにいると四方八方からの視線を感じるのです。それで、これは自分が過剰に人間でありすぎるからだ、森の一部になったらゴリラは出てくるんじゃないかと思って、森のなかにずっと立っていたんですね。そうして森の一部になりかけてきたかなと思う頃、ちらちらとゴリラが出てきて、結局最後はゴリラと一緒に壮大な夕日を眺めたりゴリラと背中を合わせて昼寝をするところまでいくわけです[1]。しかしこうなると論文を書くというようなことはしたくなくなったのか、シャラーの論文はあまり面白くなかったですね。
>
> 精神科病棟に話を戻せば、当時の精神科病棟は閉鎖的で独特な匂いがして長くはいたくないものでしたが、私はシャラーの話を知ってから、まあその一部になったらいいだろうと思ったわけです。
>
> …
>
> それから私の治療方法があまり自分を出さないものになり、窓を開け放ってそこに風が吹き込んでいるけれど誰もいない、という感じに近づいた時のほうが面接がうまくいくことに、少しずつ気づいていくわけです。そのきっかけは、シャラーの昔々の本に始まることでした。（中井, 2019a, pp.288-290）

ここでの表現では、ジョージ・シャラーの本からの影響としているが、求めるものは、人間であることをやめて、「森の一部」になることである。これも「虚」となることと言って良い。求めているものは同じなので、「ジョージ・シャラーの本からの影響」と表現しても、嘘というわけでもないだろう。「窓を開け放っ

てそこに風が吹き込んでいるけれど誰もいない」というのは、前の発言の「あけひろげた座敷に青嵐が吹いているというイメージ」と同じである。

４．シンクロニシティ

自分が「虚」になって、次に起こることを待つ。それは思慮分別を捨てた状態にこころを開くと言うことである。自我の働きを止めて、意識の底からの表現に耳を傾ける。耳を傾けると言っても、全身が耳になる。そして、耳になった全身体が、音ならざる音を聞く。こういう状態になると、しばしば出現するのが、シンクロニシティという現象である。シンクロニシティには、特別な意味はないが、通常の意識を超えた世界への開けが生まれていることの指標にはなる。

中井に現れた一つの例を見てみたい。

> 2015年に札幌学院大学で中井さんの講演会をすることが決まり、その日程をどうするかという話になった。中井さんといっしょにいるとシンクロニシティのような不思議なことがたびたびあったのだが、ここでぜひ書いておきたい逸話がある。
>
> 中井さんに希望日を聞くと「いつでもいいよ」と言うので、「じゃあマラルメではないけど、骰子一擲で決めましょう」と提案し、手近にあった菓子の空き箱の蓋をテーブルにのせ、その上で中井さんにサイコロを振ってもらった。そうして10月24日に決まった後、サイコロと空き箱の蓋をテーブルから片付けようとしたら、中井さんはニヤリとしながら、「どうも最初から決まっていたようだね」と言う。促されて見ると、蓋の裏側に子供の字で「10月24日」とサインペンで書いてあった。この不思議な出来事に筆者は驚いて、いったい何があったのかを母に確認したところ、親族の子どもたちのひとりが、母と一緒に伊丹市立図書館で本を借りた後、返却期限を忘れないように書き込んだものだという。その期限がたまたま10月24日だったのだが、筆者たちと違って平然としている中井さんに「驚かないのですか」と聞くと、「こういうことは治療のときによく起こるんだよ、だから驚くことでもないよ」と何事もなかったかのように、お茶をすすっている様子をみて、筆者たちはまるで魔術師か超能力者をみているような錯覚を覚えたものである。（村澤・村澤, 2018, pp.231-233）

中井が「こういうことは治療のときによく起こるんだよ、だから驚くことでもないよ」と言っているのは、中井の治療には治療者が「虚」になることが含まれているとすれば、うなずけることである。前の発言の中で、「虚」になることによって、治療的転機を直観するが「なぜか分裂病患者以外では、たいていはこうならない」と述べているところから、シンクロニシティが起こり易いのは、統合失調症の治療場面に多いということが言えるであろう。中井の統合失調症論や治療技法には、「虚」になるレベルの意識状態がひとつの前提になっていると思われる。表面的記述を見ていると、経験や努力で接近できるのではないかと思わせるものがあるが、現実には容易なことではないだろう。

「河合隼雄先生の対談集に寄せて」という文章の中で、中井はシンクロニシティについて次のように語っている。

> ユング派の人と旅行すると「シンクロニシティ」がしばしば見つかる。指摘されるものは、私からみれば、要するに偶然の一

致のミーニングフルな「気づき」である。偶然は宇宙線のようにわれわれの上に降り注いでいる。そして、その気づきがあるのは、気づく人にあらかじめ自由連想の流れがあり、きらきらした眼差しが、そして無償の好奇心があってのことではないか。そしていかなる「気づき」も治療に活用が可能である。プラグマティストの私には、偶然を偶然に返し、そこから自由連想によって思いがけないヒントを得るということでよいであろうと思う。「シンクロニシティ」はまったく人間世界に属し、「発見的heuristic」である。人生も精神療法も大いに偶然的に左右され、それに翻弄されることもあるが、それを活用して思わぬ展開が起こることもある。（中井, 2019a, p.80）

シンクロニシティには何の神秘性もない。むしろ問題は、そこからどのような治療的ヒントを得るかである。シンクロニシティから、何の治療的「気づき」も得られないなら、シンクロニシティを発見しても意味はない。逆にシンクロニシティなどなくても、治療的「気づき」が得られるならそれで充分である。この言葉は、「虚」になることによって得られる智慧にもそのまま当てはまる。それが最も重要な方法だとか、決定的な気づきはそこからしか生まれないとか、そういう意味づけから離れている。

中井がシンクロニシティの問題を、河合隼雄の対談集の解説に書いたのは、この気づきを与えたのが、河合であるということを示唆しているかも知れない。河合が「因果的思考や操作しようとする姿勢を放棄して、できる限り自分の意識のレベルを下げてクライアントと向き合っていると、自然治癒の状況が生じやすい」（河合, 2002, pp.128）というのは、中井の言う「虚」になるということと共通しているであろう。

5．身体が動くこと

中井は、スクイッグル、分割色彩法をはじめ、種々の絵画的コミュニケーションを治療の中に取り入れている。それは技法と言うより、関わりの中で、自然に生まれ、治療的意味を持たせられたものだろう。患者の前にいると、自然に身体が動いてしまう。手が動いてしまうという工合なのだろう。患者の前にいて、「虚」になっていると、患者の心の動きに共鳴して、身体が勝手に動いてしまう。そういうことを促す力に、自然に沿ってしまうのだろう。

私も診察中に絵を描くことがある。患者は「方々で絵を描かされたけど医師が描くのをみるのは初めてだ」という。ある患者にはまいど静水面に灯台のある孤島を描いた。別の患者にはどうしても恐竜になった。荒れる患者の時には秤をいくつも描いたり（心のバランスを保とうということか）、波を越えてゆく駆逐艦になったりした。ある時、「恐竜の患者」を強いて孤島を描きつつ診ていたところ、ほんとうに死にそうな感覚が起こってあわててやめた。この体験からみても、ジル症候群の叫び声はそうそう自由に別のものに置き換えさせたりはできないと思う。（中井, 2019b, p.187）

これは、ジル・ドゥ・ラ・トゥレット症候群の患者のことを書いた部分だが、治療者が患者に動かされて、自分の動いた姿をみて、患者の心の状態を知るということである。中空の楽器が、別の楽器の音に共鳴するというたとえが当てはまるだろう。このような現象は、患者をただ客観的に観察するという立場からは生まれて来ない。

次に、『治療文化論』の中の一節をとりあげてみたい。

これは山形孝夫の考察（山形, 1981）に触発された考察である。しかし、内容的には山形の考察よりはるかに踏み込んでいる。

> イエスの治療一般について、私は何とも申し上げられないが、「足を洗うこと」と「ひとびとの試みにあいつつ土に字を書く」「手をふれる」この三つは、ふつうあまり考えられていない意味があるのではないかと思う。（中井, 1990, p.189）

として、「足を洗うこと」の検討に続いて、次の考察がある。

> では、地面に字を描くことは――。
>
> これは、問いかけに対決するのでもなく、屈従するのでもない、第三の姿勢である。聴くという態度を端的に示しつつ、問いかける者をおのずと再考と沈静に導く行為でありうる。困難な治療の相談を受けている私は、しばしば、それととりたてて意識せずにうつむいて紙上にペンをあそばせつつ聴くようである。ある医師の相談を四時間ただ聴いた後、その医師から一ヶ月後に、長年同じ状態だった患者がとにかく変わったという便りをいただいた。
>
> むろん、未知の医師が私のところへたずねてくるということはめったにない。そのような行為を実行するということに、おそらく、何か機が熟するものがあったのであろう。しかし、私が治療のいちいちに理論的経験的コメントをつけていたら、あるいは違った結果になっていたかもしれない。
>
> その医師はむろんパリサイ人と比定されるひとではないが、ひとつの解決依頼であると同時になにがしかの挑戦であり、それであってよいことである。
>
> 「その人の拘束をすぐに解くことは、誰にもできませんね、むろん私にも」と私は最後に言っただけであった。（ibid., p.192）

これはヨハネによる福音書第８章を下敷きにしているエピソードである。ヨハネ福音書では、イエスを試すために、パリサイ人が姦淫した女をイエスの前に連れてくる。そして律法には、姦淫した女は石打ちの刑につけることになっているが、イエスはどう対応するかを問うのである。イエスは愛を説いている、律法に従って石打ちの刑を命じれば、愛に反する。しかし、罪を許せば、律法に背くことになる。その矛盾を突き付けたのである。イエスは土の上に何かを書いていて、「罪を犯したことの無い者が、先ず石を投げなさい」と言う。集まっていた人間は、年取った人間から、その場を去って、後にはだれも残らなかったという話である。

中井のあげている場面は、暴力が多発し治療が困難となったケースを抱えた医師が、相談にやってきたということで、中井は「それととりたてて意識せずにうつむいて紙上にペンをあそばせつつ聴く」という態度であった。つまり、相談に来た医師はパリサイ人であり、困難なケースは姦淫した女、中井はイエスの立場になる。これは、意識してそういう状況になったのではなく、気がついたら、そういう状況になっていたということである。中井はペンを遊ばせながら、イエスが土に字を書いていた状況を体験するのである。「虚」になることによって、現在の状況が、イエスの体験と重なる。そこからイエスの体験の意味を知る。これは、禅の公案を通じた気づきと同じ構造である。イエスは「罪を犯したことの無い者が、先ず石を投げなさい」と述べたが、中井は「なぐられたら困りますか」という問いかけを行っているのである

（塚崎, 1993, p.166）。

６．禅問答

山折哲雄と上野千鶴子の対談で、中井の話が禅問答のようであることが指摘されていた。『中井久夫との対話』を著した村澤らも同じようなことを指摘している。

> 中井さんといっしょに話していると、不思議な感覚に陥ることがよくあった。たとえば、中井さんは筆者の一人（真保呂）をしばしば「僕のシャーマン」と呼んで、禅問答のような謎かけをすることが多かった。つまり中井さんに短いひと言を言われただけで、何が質問されているかを瞬時に理解し、それに答えることが求められるのだ。そのとき筆者は、自身の教養だけでなく、微分回路あるいはテレパシー能力を師に試されている弟子のような気持ちになり、とてつもない緊張感を味わったものである。（村澤・村澤, 2018, pp.231-232）

ここでは、「禅問答」と感じられた理由が、「自身の教養だけでなく、微分回路あるいはテレパシー能力を師に試されている」感覚として述べられている。つまり、通常の思考回路を超えた、発想を刺激されているということである。これは、無意識からのメッセージに心を開けという刺激とも言える。それは、「窓を開け放ってそこに風が吹き込んでいるけれど誰もいない」世界からのメッセージに耳を傾けろという促しである。おそらく、中井が久松真一の許で坐禅していたときに、経験していた体験に基づくものであろう。このような体験は、統合失調症の患者と話しているときにも、感じられるものでもある。また、あるレベルの心理療法の場でも生ずることである。

中井は、河合隼雄の対談集の解説に次の様に書いている。

> たとえば、患者との関係を「あたたかく突き放し、冷たく抱き寄せる」と私に言われたことがある。これなどなるほどと思った。この対話篇を読んでも「相手をあたたかく突き放し冷たく抱き寄せる」のが透けて見える。それが相手との相互征服の形で、ある中間的結論に達し、そこから出発してまた新たな弁証法が始まるように読める。相互征服とは、「お互いに益し合う」ということでもある。先生は相手から智慧を引き出してそれを自らの中に取り込み同化する達人であった。（中井, 2019a, pp.81）

「あたたかく突き放し、冷たく抱き寄せる」という言葉を読むと、一般的には治療関係での転移の発生を抑制するメッセージと読み取ってしまうのではないだろうか。しかし、中井は「ある中間的結論に達し、そこから出発してまた新たな弁証法が始まるように読める」としている。つまり、コミュニケーションのさらなる展開への促しと読むわけである。ここにも、禅問答風の設定が感じられる。問いが答えであり、答えが問いである。問題は、さらなる展開に向けて、言葉が生きているかどうかである。

禅には抑下托上という言葉がある。弟子が素晴らしい言動をすると、褒めるのではなく、罵ったりこき下ろしたりする。禅の語録にはそういう言葉が頻発する。「瞎驢眼（かつろがん）」は眼の見えない驢馬の眼。「飯袋子（はんたいす）」は無駄飯ぐらい。「擔版漢（たんばんかん）」は一方向にしか視野が開けない人間。などである。こういう言葉を浴びせかけられると、褒められても喜ばず、貶されても萎縮しない人間が造られる。何を言われても、「それがどうしましたか」と問い返すことができる。つまり、コミュニケーションを止められることが

ないのである。

禅堂で坐禅していると、警策が廻ってくることがある。眠気を来して姿勢が歪んでいたり、緊張しすぎていたりすると、警策で叩かれる。これには眠気覚ましの効果ある。警策を打たれてありがたいと思うこともある。では、姿勢が崩れているときだけ警策が打たれるかというとそうではない。坐禅に集中していて、素晴らしいと思えるときも、警策が入る。これは激励の意味である。しかし、いつもそうではない。儀式的に一律に警策を入れる事もある。また、誤解からとか、ひごろの鬱憤晴らしをしてしまう場合もある。打たれた側では、その理由はわからない。ただ、気を引き締めて坐禅に集中するばかりである。現実生活が理不尽なことに満ちているとすれば、修行の過程にも理不尽さは入り込む。それを受け入れるのも、修行の内である。「窓を開け放ってそこに風が吹き込んでいるけれど誰もいない」世界は、そこに開かれる。

7．カトリックへの入信

中井は、2016年5月29日、神戸の垂水教会で洗礼を受け、カトリックの信仰に入った。すでに晩年で、車椅子で移動する状態であった。何故、カトリックに入ったのであろうか。上野千鶴子に答えたように、「便利だから」なのか。それに、何のために便利なのか。

この問題を考える時、中井の使うキーワードは「傲り」・ヒュブリスであろう[2]。晩年の中井と親しかった最相葉月は追悼文を『群像』2023年12月号に寄せているが、その題は「ヒュブリスの罪と十字架」である。この文中、中井がなぜ洗礼を受けるのかと親友に問われて、「驕りがあるから」と答えたことが紹介されている[3]。

中井は精神科医を語る時に適切な自己規定として「傭兵」と「売春婦」とを上げている。

「傭兵」については次のようである。

> 窮地に陥って生命の危機に曝された住民、尼僧、植民者あるいはジャーナリストは、傭兵を救世主のごとくに讃える。しかし、それがいっときのこと、「苦しい時だけの傭兵だのみ」であることは、安全地帯に運ばれたのちの言動の変化が証明するとおりである。
>
> 結局、傭兵が状況をこえることができないのは、精神科医と同じである。時に突然解雇される。決して、秩序回復の日に招待され表彰されることはない。（中井, 1990, pp.197-198）

「売春婦」については次のようである。

> 職業的な自己激励によってつとめを果たしつつも、彼あるいは彼女たち自身は、快楽に身をゆだねてはならない。この禁欲なくば、ただのpromiscuousなひとにすぎない。（アマチュアのカウンセラーに、時に、その対応物をみることがある。）
>
> しかし、いっぽうで売春婦にきずつけられて、一生を過まる客もないわけではない。そして売春婦は社会が否認したい存在、しかしなくてはかなわない存在である。さらに、母親なり未見の恋びとなりの代用物にすぎない。精神科医の場合もそれほど遠くはあるまい。ただ、これを「転移」と呼ぶことがあるだけのちがいである。（ibid., p.198）

しめくくりとして「精神科医の自己陶酔ははっきりと有害であり、また、精神科医を高しとする患者は医者ばなれできず、結局、かけがえのない生涯を医者の顔を見て送るという不幸から逃れることができない、と私は思う。」としている（中井, 1990, p.198）。

精神科医のヒュブリスを否定するのに、「傭兵」や「売春婦」の例をもってこなければならないほど、中井にとって、精神科医の仕事は思い上がりを刺激するものなのであろう。つまり、ある種の「悟り」に通ずるような洞察と、極めて繊細な感受性と観察力が中井には用意されているのである。能力に応じた分だけ、抑制が必要なのである。「悟り」があればあるだけ、それを隠す必要がある。しかし、実際の臨床場面にいると、眼を閉ざさない限り、そのようなヒュブリスは容易に破壊されてしまう。だから、臨床場面を離れた時に、用心が必要となる。中井がカトリックに入信したのは、そのためではないか。中井が洗礼の動機を聞かれて「驕りがあるから」と答えたのはその手がかりとなる。

禅に近づいたのなら、何故カトリックを選択したのかという疑問は当然起こってくるだろう。何故、禅の方向で出家という方法ではないのか。一つは、中井の母親は、聖書をよく読む人で、傲慢をたしなめる人であったらしい。その影響もあるだろう。また、中井が師匠として見ていた土居健郎はカトリックの信者であった（塚崎, 2012）。そして、中井の生き方を見て、「きみはほんとうはカトリックなのにそれに気づいていないのだ。」と指摘していたという[4]（中井, 2010, p.130）。

禅には、カトリック信仰と親和性が見られる部分があり、カトリックの神父で禅に近づく人もしばしば見られる。カトリックの神父で、臨済禅の修行を終えて老師となっている人もある。プロテスタントには修行に類するものは見られないが、カトリックにはイグナチウス・ロヨラの「霊操」など修行体系に類した方法も存在している。また、聖人信仰など、信仰が個人の人格の形として現れることを認める発想もある。カトリックは歴史性と組織性が確立していて、個人の計らいで左右されることがないことも選択された理由になっているだろう[5]。

いずれにしても、ヒュブリスが問題であったと思われる。すでに見たように、場合によっては、中井はイエスの身の上に自分を重ねてしまう体験をしてしまう面がある。臨床を離れ、患者からの冷徹な目にさらされなくなった時、とりわけ慎重にする必要がある。そのためには、イエスキリストの足元に身を委ねることが、最も適切だったのではないだろうか。つまり「便利」だったのではないか。

中井は洗礼を受けたことを、公にはしていない。洗礼式に呼ばれたのも、親族など、ごく限られた人達だった。身体の状況から見て、熱心に教会活動に参加できる状態でもなかった。土居健郎が「男は信仰を市場に出さない」と述べた様に、控えめであったであろう。しかし、それは中井が信仰を隠していたということではない。2017年5月に発行された『KAWADE　夢ムック　文藝別冊　中井久夫―精神科医のことばと作法』の表紙の顔写真は洗礼式の写真である。精神科医で文化功労者の「中井久夫先生」が、肩書きのない「パウロ中井久夫」となった日の写真である[6]。

8．おわりに

中井は禅から得たものを臨床の基礎に置いていたと考えられる。しかし、そのことを言明しなかったのは、ヒュブリスへの危険を感じたからであろう。最終的にカトリックに入信することとなったのは、ヒュブリスへの処し方の結論と言える。中井が臨床の基礎においたものを、トランスパーソナル心理学／精神医学の視点で捉えようとすると、中井が問題にした、ヒュブリスをどのように処理するかが、課題となるであろう。

付記

中井先生の葬儀の日、私は招待されていないのに葬儀

に参列した。あまつさえ、棺を運び出す一人となった。讃美歌405番を歌いながら…。しかし、私にとって中井先生はまた会う人ではなく、日々会い続け、そして、生き続ける存在である。

注

1　シャラーの著作には、「ゴリラと背中を合わせて昼寝をする」話は出て来ない。対談本であるため、厳密な出典検討はおこなわれていないのであろう。シャラーの『ゴリラの季節』には、ゴリラと同じ枝に座る話はでてくるが、直接肌をふれあうことはない。しかし、本の中にあるゴリラとの関係の雰囲気は、中井の述べているものに近い。中井がシャラーの本からの影響と述べているが、実際は中井の体験と同じものをシャラーの著作に発見したのであって、シャラーの著作から中井が誘導されたのではないと感じられる。これはヒュブリスを避ける表現技法の一つである。

2　サリヴァンは「分裂病の治療に必要なのは謙虚さ」と強調して、精神科医にそれが欠けていることを歎いていたとサリヴァンの秘書をしていたペリーは述べている（Perry , H, S., 1982/1985, p.294）。

3　洗礼式の場で、著者も同じ質問をしたが、中井の答えは、しばしの沈黙の後「やはり求めていたのでしょうね。」だった。質問者によって、答えは違っているが表現しているものは同じだろう。

4　洗礼式の場で、「カトリックを選んだのは、土居先生の影響がありますか？」と尋ねると、「それもあるでしょう。」との答えだった。それに続けて、土居健郎の言葉を確認すると、「それは恐れ多い。」と大声で笑った。中井の尊敬したサリヴァンが、カトリックであったことも影響しているかもしれない（中井, 2012, p.121）。サリヴァンのカトリック信仰については、『サリヴァンの生涯』（Perry , H, S., 1982/1985, p.294）が参考になる。

5　カトリック信仰へ中井の心が動いた動機について、中井が所属していた教区では、「同じ施設の入居者が信者仲間から訪問を受けているのをみたからだ。」という意見も聞かれる。しかし、実際には中井がそのような面会をすることは限られていたようだ。中井の意向か、新型コロナウィルス感染症蔓延による面会制限など他の理由によるかは不明である。

6　サリヴァンの堅信礼での教名はフランシスである（Perry, H, S., 1982/1985, p.135）。

文献

星野弘他（1998）「治療のテルモピュライ 中井久夫の仕事を考え直す」星和書店.
河合隼雄（2002）『心理療法入門』岩波書店.
北原隆太郎（2006）『覚の参究＜世界禅＞を生きる』春秋社.
村澤真保呂・村澤和多里（2018）『中井久夫との対話』河出書房新社.
中井久夫（1990）『治療文化論』岩波書店.
――――（2010）「土居先生は時々私に語った」『土居健郎先生追悼文集―心だけは永遠』土居健郎先生を偲ぶ会.
――――（2012）『サリヴァン、アメリカの精神科医』みすず書房.
――――（2017）『中井久夫集2』みすず書房.
――――（2019a）『中井久夫集10』みすず書房.
――――（2019b）『中井久夫集11』みすず書房.
H.S.ペリー（1985）『サリヴァンの生涯1』中井久夫・今川正樹（訳）. みすず書房.
（原著Perry, H, S., 1982.*Psychiatrist of America The Life of Harry Stack Sullivan*.The Belknap Press of Harvard University Press.）
最相葉月「ヒュブリスの罪と十字架」『群像』2023.12号: pp.224-233.
シャラー , ジョージ・B（1977）『ゴリラの季節』小原秀雄（訳）. 早川書房.
（原著 Schaller, G.B., 1964. *The Year of the Gorilla*.The University of Chicago Press.）
塚崎直樹（1993）『精神科主治医の仕事』アニマ2001.
――――（2007）「公案からみた禅と心理療法」『トランスパーソナル心理学/精神医学』7（1）: pp.61-66.
――――（2012）「甘え理論とカトリック」『精神療法』金剛出版. 38（1）: pp.85-91.
山形孝夫（1981）『治癒神イエスの誕生』小学館. 1981.
山折哲雄・上野千鶴子（2018）『おひとりさまVSひとりの哲学』朝日新書（651）. 朝日新聞社.

邦文抄録

統合失調症の治療に大きな足跡を残した中井久夫が禅との関わりをもったことは、あまり知られていない。しかし、座談会の様な場での発言には、禅的な体験が患者との関わりのなかで、一つの基盤となっていたことが語られている。また、中井との対話が、対話相手から禅問答のようだと受けとめられることもあった。そのような対話を掘り下げてみると、宗教性と言っても良い性質がそこには見られる。中井はそのような体験の質が、精神科医を傲慢にさせるという自戒を持っていた。臨床から離れた段階で、中井はカトリック信仰を選択することによって、その傲慢さを封じ込めたと言えるのではないか。

キーワード：禅・禅問答・フロー体験・ヒュブリス・カトリック信仰

Abstract

It is not widely known that Hisao Nakai, who left a significant mark in the treatment of schizophrenia, had a relationship with Zen. However, in his remarks at roundtable discussions and other such events, he spoke of how his Zen experience served as a foundation for his interactions with his patients. In addition, Nakai's dialogues were sometimes perceived by his interlocutors as a kind of Zen question-and-answer session. When we delve deeper into such dialogues, we find a nature that could be described as religious. Nakai was self-conscious that the quality of such experiences made psychiatrists arrogant. It could be said that Nakai contained his arrogance by choosing the Catholic faith at the stage when he left clinical practice.

Keywords: Zen, Zen dialogue, Flow, Hubris, Catholic faith